財団法人日本交通公社

観光文化

Tourism & Culture

VOL. 193
2009 January

特集◎横浜開港150周年

◆巻頭言
横浜都市づくり150年の軌跡　田村　明……①

◆特集
- ペリー来航と横浜開港
  ―歴史遺産を訪れ、日本の近代化の原点を振り返る　西川武臣……②
- 外国人が見た・書いた・描いたYOKOHAMA　宮野力哉……⑦
- 文化芸術創造都市の形成と開港百五十周年　今井信二……⑫
- アイ ラブ ヨコハマ　バーリット・セービン……⑰

◆連載
Ⅰ　あの町この町　第31回
八福神のお出まし―新潟県・糸魚川市　池内　紀……㉒
Ⅱ　風土燦々④
いだごろ踊りの山里（前編）―宮崎県美郷町　飯田辰彦……㉘
Ⅲ　ホスピタリティーの手触り52
ホテルと旅館　山口由美……㉚

◆新着図書紹介……㉜

大和川酒造の蔵

蔵の街・喜多方は一八八〇年(明治十三年)の大火を経験し、二千を超す蔵のある町が形成された。街を歩けば白壁の蔵座敷などが目を引く。改装した美術館には竹久夢二や横山大観の作品が所蔵され旅人に親しまれている。黒漆喰で風格のある甲斐本家の五つ畳の蔵座敷は書院造で芸術性が高く見応えがある。農家の穀物蔵や味噌蔵など使用しなくなった蔵を移築して古い街並みを再現した「蔵の里」も興味深い。写真の大和川酒造は造り酒屋の中でも老舗中の老舗で、創業は江戸期の一七九〇年(寛政二年)である。現在、大和川酒造北方風土館として無料公開され、多くの旅人たちが立ち寄る。仕込みタンクが並ぶ仕込み蔵の作業を見学したり、清冽な伏流水の落下する光景を目にするのも楽しい。酒造りに関する骨董品を鑑賞するスポットもあり、造り酒屋の歴史をしのぶのもいい。

利き酒コーナーも設けられていて、数々の銘酒を求めるのも醍醐味ではなかろうか。

(写真・文　樋口健二)

横浜都市づくり150年の軌跡

法政大学名誉教授　田村　明

横浜開港は一八五九年（安政六年）六月（新暦七月）、今年がちょうど百五十年に当たる。その前年の一八五八年（安政五年）七月に結ばれた日米修好通商条約では、開港場は「神奈川」と明記されていたが、幕府はあえて東海道から外れた横浜（現在の関内）に新たな都市を造り開港した。

横浜が歴史の舞台に上がるのは、開港より五年前の一八五四年（嘉永七年）三月、ペリー提督が上陸し日米和親条約を締結した時だ。これにより日本は長い鎖国を終え、国際社会の一員としてスタートした。横浜は日本の開国を記念する唯一の都市である。

百戸ほどの寒村を立ち退かせて全く新しい都市を建設した。他の開港場の長崎や箱館は遠く、兵庫の開港は遅れたから、外国に開かれた文明開化都市として先頭に立つ。幕末から明治にかけ、新しいことはすべて横浜から始まった。

こうした輝かしいスタートを切りながら、その後は多くの災厄に見舞われる。一九二三年（大正十二年）の関東大震災では東京以上の災害を受け、震災復興の式典からわずか十五年後、アメリカ軍の空襲で再び壊滅する。戦後は日本占領軍であるアメリカ第八軍司令部が置かれ、米軍は主要な埠頭施設のほか、その背後地である横浜の都心すべてを、軍の宿舎や物資の集積所という軍事基地にしてしまった。やっと戦後十年ほどで都心部を返還してもらうが、もう一度焼け跡時代に返る。ほかの都市は「もはや戦後ではない」と復興から成長の時代に入っているのに、横浜は心臓を失った姿のままだった。その上、東京から押し出された人口増加の波は、小さな丘陵を乱開発し、がけ崩れや水害をもたらし、学校や上水、ごみ処理施設の不足という深刻な問題を引き起こすが、国には対応する施策はなかった。

横浜には文明開化の歴史以来、新しいことに挑戦するＤＮＡがある。混迷の続く一九六三年（昭和三十八年）に市長になったハマッ子の飛鳥田一雄は、それまで官僚的だった市政を市民のものにする自治体の変革を試みる。当時は反対する勢力が強かった市民参加を訴え、現在では当然のことにしてしまった。中央各省庁の下請け執行機関にすぎなかった横浜市は、自ら新たな都市づくりに取り組む。国際性ある文化と中枢性のある都市を目指し、その実現のために、みなと未来やベイブリッジを含む六大事業を発表した。金がない権限がないと言われたが、主体性ある知恵と工夫によって現在ではすべて実現している。

事業は行えばよいのではなく、都市の個性を生かすことを考えた。赤レンガ倉庫や石造のドックは文明開化時代をしのばせるもので、保全し有効に活用した。ペリーが上がってきた地点は開港広場として整備する。特色ある山手の丘には独自のルールをつくる。市にアーバンデザインのチームをつくり、当時の建設省と争いながらも景観や歩行者を重視し、専門家も育てた。戦後見る影もなかった横浜は魅力ある都市として再生しつつある。

都市づくりに終わりはない。開港百五十年はひとつの通過点にすぎない。ただこの機会に、困難な時にも個性と主体性を失わず、新しいことを切り開いてきた横浜市民の歴史と伝統に思いを寄せ、さらに今後に展開させていくべきだろう。

（たむら　あきら）

横浜開港百五十周年

二〇〇九年に横浜は、一八五九年（安政六年）に開港してから百五十周年を迎えます。開港以来、日本の貿易および外交の拠点となり日本最大の国際都市として発展します。今号では、横浜の歴史を振り返るとともに、開港記念事業をはじめ、今後の観光交流への具体的な取り組みなど、横浜の最新動向を紹介します。

特集 1

ペリー来航と横浜開港
――歴史遺産を訪れ、日本の近代化の原点を振り返る

横浜開港資料館主任調査研究員　西川　武臣

ペリー来航と「たまくすの木」

二〇〇九年（平成二十一年）、横浜は開港して百五十周年を迎えるが、近代の横浜は、日本最大の国際都市として発展し、西欧文化流入の窓口として日本の近代化に大きな足跡を残してきた。幕末・明治の横浜では多くの日本人が世界中の人々と交流し、さまざまな西洋の文物に触れることになった。これが、日本人の意識を変えることになり、やがて日本は政治・経済・文化のあらゆる面で近代化や西欧化を推し進めていくことになった。

横浜が日本の歴史に名を残した最初の事件は、一八五四年（嘉永七年）のペリー来航で、この時、横浜村で日米和親条約が結ばれたことによって、横浜は一躍有名になった。条約が結ばれた場所は、現在の横浜市中区の横浜開港資料館が立っている地点で、この地に幕府は「応接所」を建て、四回にわたる交渉の末、三月三十一日に日米和親条約を結んだ。条約ではアメリカ合衆国に下田（静岡県）と箱館（北海道）を開き、アメリカ船に対し食料や水などを供給することが決められた。また、条約締結の過程で、多くの日本人が艦隊乗組員と交流を繰り広げ、この結果、日本人の国際化は急激に進んでいった。ちなみに、横浜村にペリー艦隊の乗組員が初めて上陸したのは二月二十五日で、艦隊が東京湾を去ったのは四月中旬であったから、横浜村での交流は一カ月半以上に及んだことになる。

また、乗組員の総人数は千八百人を超え

『ペリー提督横浜上陸の図』　ハイネ画　横浜開港資料館蔵
1854年３月８日の光景を描いたもの。右に描かれた木が「たまくすの木」である

たといわれ、この中には、白人だけでなく中国人や黒人も含まれていたから、この時、日本人は、世界に多くの民族・国家・人種があることを認識することになった。ペリー艦隊の通訳を務めた中国人の羅森は、ある日本人と筆談し、「文化人である中国人のあなたが、野蛮と思っていた西洋人の部下として働いていることが不思議である」と言われたと日記に記しているが、ペリー来航は日本人の「中華思想」を大きく変えた事件であったようである。

これに加えて、ペリーが幕府への贈答品として持参した西洋の文物は、日本人に西洋諸国の工業力を強烈に印象づけた。ペリーの持参した品物は、蒸気機関車の模型、電信機、銃器、農具、ボート、香水、図書や絵画などさまざまであったが、最も日本人を驚かせたのは機関車の模型と電信機であった。三月二十一日、ペリーは「応接所」の脇に一周約百メートルの線路を敷設し、機関車の模型を走らせたが、この時、幕府の役人の中には機関車の屋根にまたがり、大喜びした者がいたと伝えられる。

また、電信機については三月二十二日に公開実験が行われ、「応接所」付近から約一キロメートルもの電線が張られ送受信が行われた。実験に参加した日本人は、一瞬にして言葉が送られたことに驚きの声を上げたといわれている。さらに、ペリー艦隊は交渉の過程で度々祝砲や礼砲を発射したが、海上に響き渡る大砲の音は、日本人に西洋諸国の強大な軍事力を実感させた。

ところで、ペリー艦隊について記した古記録の中には農民や町人が記したものが数多く含まれている。これは農民や町人が日米交渉を目の当たりにしたためで、ペリーが横浜村に上陸した際の様子を描いた絵に

もペリーを見物する多くの庶民が描かれている。艦隊乗組員との交流は、幕府や諸藩の武士だけでなく、広く庶民とも行われたのであり、ペリーの来航は一般庶民の国際化も急速に進めることになった。

残念ながら、このように大きな意味を持ったペリー来航であるが、当時の横浜村の様子をしのぶことができるような史跡はほとんど残っていない。ペリー来航当時の半農半漁の村は、その後の急激な都市化によって失われ、現在、わずかにペリー来航当時から生えていた「たまくすの木」が横浜開港資料館の中庭に残されているだけである。ちなみに、この木はペリー艦隊の随行画家ハイネが描いた『ペリー提督横浜上陸の図』にも描かれ、日米和親条約の締結を眺めていた木として知られてきた。そのため横浜市教育委員会は一九八八年（昭和六十三年）に「たまくすの木」をペリー来航ゆかりの木として地域史跡に指定し、現在、多くの観光客が「たまくすの木」を訪れている。

横浜開港と二つの土木遺構

日米和親条約の締結は日本の外交政策を大きく変えたが、この条約は貿易に関する条項を含んでいなかった。そのため一八五六年（安政三年）八月に来日した初代アメリカ総領事のハリスは、通商条約の締結を求めて、幕府と粘り強く交渉することになった。貿易に関する条約（日米修好通商条約）が締結されたのは一八五八年（安政五年）七月二十九日で、ハリスは現在の横浜市金沢区の沖に停泊したアメリカ軍艦ポーハタン号上で条約に調印した。

通商条約では、横浜・長崎・新潟・兵庫・江戸・大坂を外国人が商売のできる都市とすることが定められ、各都市は一八五九年（安政六年）以降、順次、開港場（外国船の入港が認められ、外国人が永住することと商売をすることが認められた都市）や開市場（外国人が商売をすることを認められた都市）になることが決められた。こうして日本の鎖国体制は完全に崩れ、翌年七月一日に横浜は開港場として外国人に開かれることになった。

また、日本と通商条約を結んだ国も次第に増加し、幕府が倒壊した一八六八年（明治元年）までに、日本はアメリカ、オランダ、イギリス、フランス、ロシア、ポルトガル、プロシャ（ドイツ）、スイス、ベルギー、イタリア、デンマークと条約を締結し、横浜はこれらの国々の人々が住む町になった。さらに、清国とは一八七一年（明治四年）まで条約を結んではいなかったが、開港以来、多くの中国人が西洋人に雇用される形で来日するようになり、やがて彼らの中から、大きな資本を使って中国との貿易を担う商人も現れるようになった。

一方、横浜の市街地は、幕府の都市計画に基づいて造られ、開港した年の一月から建設が進められた。開港期日の七月一日までわずかの期間しかなかったため、工事は急ピッチで行われ、わずか半年余りの間で、半農半漁の村は外国人が住む都市へと変貌した。開港場の西部地域では、当時の一級国道であった東海道から開港場へ向かう「横浜道」と呼ばれる道の造成が行われ、現在の神奈川県庁付近では運上所と呼ばれる奉行所の建物が建てられた。また、現在の横浜市中区山下町一帯には外国人の居住区が、その隣には日本人商人の居住区が造成され、内外の商人が移住する準備が進められた。

日本人の商人は関東を中心に全国から移住し、開港直後に出版された瓦版によれば、この段階で百人以上の人々が外国商人と貿

易することを願い出ている。外国商人については一八六一年（文久元年）の記録があり、横浜にはイギリス人五十四人、アメリカ人三十八人、オランダ人二十人、フランス人十四人などが住んでいたことが分かっている。このほか、横浜には諸外国の外交官も居住し、横浜は貿易だけでなく外交の拠点にもなっていった。

ところで、近年、幕末に築造された二つの土木遺構の修復や調査が進められている。そのひとつは「象の鼻」と呼ばれる波止場の遺構である。幕府は開港に先立ち、開港場の海岸部に波止場を築造したが、現在、この波止場は、横浜市港湾局によって明治時代中期の姿に復元されつつある。工事は二〇〇九年六月までに終了する予定であり、開港記念日には大さん橋国際客船ターミナルの根元にかつての波止場が姿を現すことになっている。かつて、この波止場では生糸・蚕種（蚕の卵）・茶などの輸出品、綿織物・毛織物・砂糖・武器などの輸入品が移出入したが、復元された波止場を訪れ、横浜が国際港として輝いていた時代をしのんでいただければと思う。

次に、調査が進められているもうひとつの土木遺構は、「神奈川台場」と呼ばれる砲台である。砲台は港を防衛するだけでなく、条約締結国の国王や大統領の誕生日に祝砲を撃ったり、外国の領事や公使が離着任する際の礼砲を撃ったりするための施設で、開港場に不可欠のものであった。そのため、幕府は開港直後に、四国の松山藩に砲台の建設を命じ、松山藩は神奈川宿の海岸部（現在の横浜市神奈川区神奈川一丁目付近）に砲台を築造した。

現在、神奈川区役所では砲台の礎石の発掘調査を行っているが、土中にいくつかの礎石が残っていることが確認された。礎石の保存と公開についてはどのようになるのか分からないが、砲台の礎石はかつて横浜が領事や公使のやってくる外交の拠点であったことを伝えている。

「象の鼻」を描いた横浜浮世絵　３代広重画　横浜開港資料館蔵
「象の鼻」は幕末に築造された波止場の名称。象の鼻のように湾曲した形をしていたため、このように呼ばれた

震災や空襲の被害を乗り越えて

横浜は、相次ぐ火災、関東大震災や空襲によって甚大な被害を受け、歴史的な建造物はほとんど残っていない。開港当初に建てられた建物の多くは一八六六年（慶応二年）に発生した大火で焼失し、その後に建てられた建物も関東大震災で失われた。わずかに耐震構造の建物がいくつか残されたが、戦災を経て現在に残された建物は、国際都市として発展してきた横浜の歴史を今に伝えてくれる。

例えば、一九〇四年（明治三十七年）に竣工した横浜正金銀行本店の建物（現在の神奈川県立歴史博物館）は、妻木頼黄と遠藤於菟が設計したもので、国の重要文化財に指定されている。横浜正金銀行は貿易に伴う外国為替を扱った銀行であり、重厚な建物を眺めていると、横浜での貿易がいかに隆盛していたのかを感じることができる。

また、大蔵省臨時建築部が設計した新港埠頭赤レンガ倉庫は一九一一年（明治四十四年）に竣工し、長さ百五十メートルに及ぶわが国有数のレンガ造りの建築である。さらに、同年に竣工した三井物産ビルは日本最初の本格的鉄筋コンクリート建築であり、大震災の激震にも耐え、これ以後、鉄筋コンクリート建築が普及するきっかけを作った建物である。これらの倉庫は横浜港から輸出された生糸を保管するために利用された。

ところで、震災や空襲によって失われたのは建物だけではなかった。横浜の場合、かつて開港場が置かれた地域には古文書や古記録が全く残っていない。長く続いた老舗であっても店舗が焼失しているため、店の帳簿や書類は失われている。また、市役所や県庁にも火が入ったため、戸籍や土地台帳などの公文書も残っていない。そのため、私が勤務する横浜開港資料館では横浜開港以来の横浜の歴史に関する資料を国内はもとより世界中から収集してきた。

現在、横浜開港資料館が所蔵する歴史資料は約二十五万点に達しているが、こうした資料から横浜の歴史を作り上げてきた先人たちの足跡を知ることができる。例えば、同館では、イギリスやアメリカの国立公文書館が所蔵する駐日公使や領事の報告書をマイクロフィルムで収集しているが、こうした記録から横浜を舞台にどのような外交が行われたのかを知ることができる。また、生糸や茶の生産地には横浜の貿易商が送った手紙や取引に関する書類が残され、貿易の実態を具体的に知ることができる。

ビジュアルな資料としては、横浜の風景や外国人を描いた横浜浮世絵や外国人カメラマンが撮った写真、明治時代後期に大量に発売された絵はがきなどがあり、世界中の古書店などから収集している。これらの資料からは失われた横浜の風景を再現することができる。

残された歴史資料は、「たまくすの木」や土木遺構、歴史的な建築物と同様に、国際都市であった横浜の歴史を今に伝える文化財であり、日本の近代化の窓口であった横浜のアイデンティティー（独自性）を後世に伝えるものである。横浜開港百五十周年を迎える現在、史跡を訪れ、歴史資料に触れ、横浜の歴史への関心を少しでも深めていただければと強く願っている。なお、横浜開港資料館では四月二十二日から七月二十六日まで横浜開港にかかわる歴史資料を紹介する企画展「港都横浜の誕生―新発見資料に見る近代化の原点」を開催する予定である。

（にしかわ　たけおみ）

特集２

外国人が見た・書いた・描いたYOKOHAMA

美術エッセイスト　宮野　力哉

一八五九年七月一日（安政六年六月二日）、横浜は開港した。

秘密の小箱が開いたと、欧米からわんさと押しかけてきた。飛行機はまだない。数十日の長い船旅、ようやく近づいてきた日本。船のほとんどは、横浜に入港した。

そう、外交官も学者も、小説家も画家たちもやってきた。彼らの目に、横浜はどう映ったのか。多くの人が書き・描き、帰国して出版した。

一八八五年（明治十八年）に来日したフランスの作家ピエール・ロチは、一八八九年に出版した『秋の日本』でこう言う。

「それは修正前の写真の細部のように、事実に忠実であることは確かである。めまぐるしく変化するこの国において、それはおそらく、日本人自身にも興味ぶかいことであるだろう。何年か過ぎたあとで、彼らの発展の過程がここに書かれているのを見出すことは……」（村上菊一郎・吉氷清訳、平凡社世界教養全集）

東洋の不思議な島国へ好奇のまなざしを寄せる、かの国の人たちへの記述。そこには、賛美や侮蔑や失望も入り交じって、〝包み隠すことなく表現された日本〟がある。その中からまず、横浜入港の場面を抽出してみよう。

はるかな横浜へ――

「その国では、空がいつも青く、太陽が絶え間なくかがやいている」「この世ながらのお伽の国。だが、天の恵んだ、この幸福な島国をおとずれる機会がやってこようとは、夢にも思わなかったのである」と書き出すのは、イギリスの外交官アーネスト・サトウ。

一八六二年（文久二年）九月の早朝、「実に陽光燦々たる、日本晴れの一日であった」「ミシシッピ・ベイ（根岸湾のこと）の白い断崖がだんだん近くなり、それが次第にはっきり見えてきた。船は条約岬（本牧岬のこと）を迂回して、碇泊地のすぐ沖合のところに投錨した。一年余りの月日をへて、とうとう宿望を達したのである」（『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳、岩波文庫）。前年八月に任命され、あこがれが実現した感動。

「絵のような岬の条約岬を後にすると、突然岬の後ろに横浜の埠頭と町が見えてきた」（『アンベール幕末日本図絵』高橋邦太郎訳、雄松堂書店）と、一八六三年（文久三年）四月に来浜したスイス通商使節団のエーメ・アンベール。**図1**は帰国後に出版した『LE JAPON ILLSTRE』に載せた、山手からの眺望（写真によるE・テロンの作画とある）。手前の家並みは元村（現在の元町）、橋のか

かる川の向こうは外国人居留地。はるか沖合に点々と各国の船が見える、開港四年後の横浜である。

一八七六年（明治九年）に入港したフランス人エミール・ギメは、「朝もやの中に日本の領土の不思議なシルエットがぼんやりと浮き出てくるのが見えると、心は二重の感動で満たされる。港に着くというごく当り前な喜びに、あのほとんど幻想的な国にやっとたどり着くのだという喜びが加わってくる」（『1876 ボンジュールかながわ』青木啓輔訳、有隣新書）。

「それは、十八世紀の漆器、屏風、磁器、そして象牙細工が私たちに思い描かせ……」ると、パリにある国立ギメ博物館の創設者らしい感銘をつづった。

一九〇六年（明治三十九年）二月、英国国王エドワード七世の名代としてアーサー殿下が入港してきた。明治天皇にガーター勲章を奉呈する使節団である。「この時ほど、栄光に輝いた日の出はなかったのではあるまいか。これ以上の素晴らしい光景を朝日が照らし出したことはなかったに違いない」「ナポリ湾のように真っ青な湾の中に浮かぶ何隻かの船も、すべて装いを凝らしていた……」（『英国貴族の見た明治日本』長岡祥三訳、新人物往来社）と書くのは、アーネスト・サトウとともに在日公館で活躍したイギリスの外交官A.B.ミットフォード。随行員として三度目の来日であった。

北斎の富士か――

入港のとき、横浜の背景を飾っているのは、富士山である。アーネスト・サトウは、「これにまさる風景は世界のどこにもあるまいと思った。濃緑の森林をまとった形状区々たる小山が南岸一帯に連なっている。それらを見おろすように、富士の秀麗な円錐峰が、残雪をわずかに見せながら一万二千フィート以上の高空にそびえていた」と。

「船は〝日出づる国〟と呼ばれるニッポン国の沿

図1　神奈川県立歴史博物館蔵『LE JAPON ILLSTRE』より

岸に近づいた」「曇っていた空は急に青空が広がって、水平線上に秀麗な富士山が浮かび出た。四千メートル近い高さのこの山の頂きには雲がかかっていた」と書くのは、一八六六年（慶応二年）に入港したイタリアのV.F.アルミニヨン（『イタリア使節の幕末見聞記』大久保昭男訳、新人物往来社）。

一八七六年に来浜したフランスの画家フェリックス・レガメーは、「遥かかなたには、堂々とした富士山が、乳白色のネクタイをした姿を現してくれます。まさに絵のとおり。日本の優れた画家たちは、私たちをだまさなかったのです」（『レガメ日本素描紀行』青木啓輔訳、松雄堂）と言う。本牧沖とされる葛飾北斎の『神奈川沖浪裏』を思い浮かべていたのだろう。優れた画家とは北斎であり、富嶽三十六景ではなかったか。

そのころ、船が接岸できる桟橋はなく、沖に停泊。船客ははしけで波止場に上陸した。「はしけの船頭のきゃしゃで上品な手は、何の努力も見せていないようで、それをもち上げる動きは、粗野な船頭よりはむしろカスタネット奏者を連想させる」とギメは言う。**図2**はギメと同行したレガメー描く、カスタネット奏者。後ろから富士山がのぞいていたにちがいない。ギメの著書『PROMENADES JAPONAISES』に掲載された。

しかし、晴れた日ばかりではない。「私は初めて日本に上陸して、みじめな失望を味わった」と言うのはミットフォード。一八六六年九月、初来日した。「多くの人がその美しさをたたえたあのお伽の国なのだろうか。空は灰色で暗く、悲しげだった。突風は雨傘を裏返しにし、レインコートも

図2　©Collection Christian Polak

役に立たないほどの勢いだった。類なく美しい神の山、富士山は、いったいどこにあるのだろう。オダリスクのようにヴェールに隠されて見えないのだろうか」（『英国外交官の幕末維新』長岡祥三訳、新人物往来社）と。

一九〇二年（明治三十五年）の早朝「まずピンクの光が射し始め、次いで青色の光と琥珀色の光が射してきた。紅色に輝く青空高く、山裾に漂う夜の靄の遥か上の方に、大空から吊り下げたように、円錐形をした清らかな富士の峰が聳えていた」と、感動したイギリスの写真家H.G.ポンティングは、この世の楽園と書いた。その後、「船で東京湾に入ったことが二回あるが、二度とも霧雨の降る中であった。もし私が霧の後ろ側に何があるか知らなかったとすれば、この夢の国に陰鬱な印象しか持たなかったに違いない」（『英国特派員の明治紀行』長岡祥三訳、新人物往来社）と言う。

マンガ大国の源泉――

文字と絵で、日本を横浜を報道するとやってきたのは、図3のチャールズ・ワーグマン。イギリスの絵入り新聞イラストレイテッド・ロンドン・ニュースが派遣した、記者であり画家である。一八六一年（文久元年）八月、その新聞に横浜からの第一報が載った。「開港地の街路は広く、家々は木造であるが、どこかスイスのシャレー（田舎屋）風に白で引き立てた灰色の屋根をもち、たいへん美しく、きちんとした仕上りなので見るからに楽しい気がする」（『描かれた幕末明治 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信1853-1902』金井圓編訳、雄松堂書店）。

同じ紙面に、彼が描いた図4も掲載された。毎日午後になると町角に現れ、「バンジョーで伴奏」しながら群衆に語りかける、講釈師だと説明する。

そんな開港地を、ほめる人だけではない。「東京湾で繰り広げてくれるパノラマは素晴らしかった。しかし、これから上陸しようという横浜を望見して旅行者はがっかりする……。絵のように美しいという東洋らしさがない。日本的かといえばヨーロッパ色が濃過ぎるし、ヨーロッパ的かといえば日本調

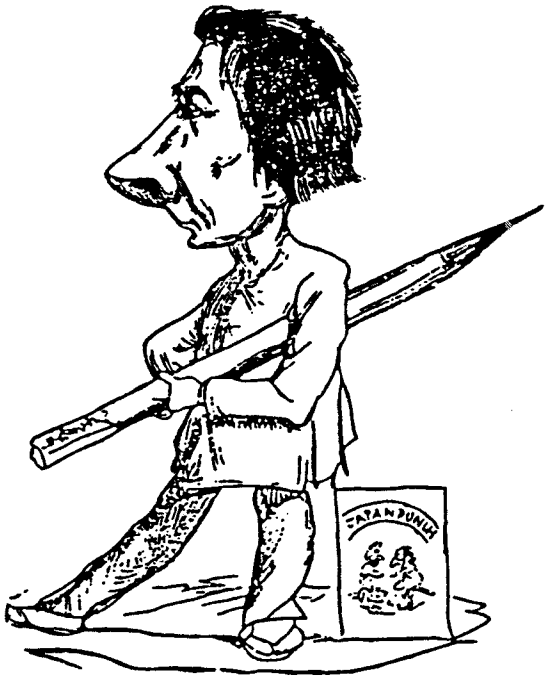


図3　神奈川県立歴史博物館蔵『THE JAPAN PUNCH』より

図４　神奈川県立歴史博物館蔵『THE ILLUSTRATED LONDON NEWS』より

が出すぎている」（『日本・人力車旅情』恩地光夫訳、有隣新書）と厳しいのは、エライザ・ルアマー・シッドモア。一八八四年（明治十七年）に来日した、アメリカの女性ジャーナリストである。

そんな彼女も日本の素朴さに引かれ、たびたび来日した。原著『JINRIKISHA DAYS IN JAPAN』のように、人力車で走り回る日々。なかでも桜に魅せられ、母国に桜を植えたいと提唱した。共鳴したのは、時の大統領タフト夫人。友好のためにと、首都東京市が寄贈を申し入れた。一九一二年（明治四十五年）春三月、三千本の若木がワシントンに到着。大統領夫人とともに、ポトマック河畔に植えつけた。毎年のように報道される、満開の桜である。

ところが一九二四年（大正十三年）、アメリカ議会は排日移民法案を決定。シッドモアはワシントンを去った。四年後、ジュネーブで他界。七十二歳であった。翌年、遺骨は横浜・山手の外国人墓地に埋葬された。

ワーグマンも同じ、外国人墓地に眠る。一八八七年（明治二十年）、彼はイラストレイテッド・ロンドン・ニュースに最後の記事と絵を発信。イギリスに帰国、弟と展覧会を開催。横浜に戻った直後、倒れた。それから三年間、闘病生活を続けた。が、一八九一年（明治二十四年）、五十九歳で逝った。

もう一度、図３をどうぞ。ワーグマンの自画像である。足元にあるのは『THE JAPAN PUNCH』。彼は来浜した翌一八六二年、居留地の外国人向けに発刊した日本最初のマンガ雑誌である。さらに高橋由一や五姓田義松に、絵の指導をした。横浜はマンガ大国・日本の源泉であり、黎明期の洋画家の苗床であった。

（みやの　りきや）

特集３

文化芸術創造都市の形成と開港百五十周年

横浜市開港百五十周年・創造都市事業本部
創造都市推進課長
今井　信二

横浜市は、現在、日本有数の都市型観光スポットとして全国から多数の来訪者を集めており、人口三百六十五万人余（二〇〇八年十二月一日現在）を擁する東京に次ぐ日本第二の大都市です。開港百五十周年を迎える二〇〇九年には、五千万人の観光客が横浜を訪れていただくことを目指しています。

横浜は、一八五九年の開港以来、関東大震災や第二次世界大戦など、さまざまな困難に直面してきました。そのため、地上の構造物で開港当時の面影を残すものは非常に数が限られており、現在、横浜に残る歴史的資産は、多くが震災復興で建てられ、戦災を生き延びてきた建物です。数は少なくなりましたが、こうした貴重な都市資産は、開港以来の文化・歴史などを思い起こさせる「都市の記憶」として横浜固有の魅力アップに役立っています。

横浜市では、こうした開港以来の歴史を生かし活用しながら、歩いて楽しい街を目標としたさまざまな施策を、一九七〇年代から都市デザインへの取り組みによりスタートしました。例えば、日本大通り、馬車道、元町などの商店街や居住者などのまちづくり組織と連携して各地区の特性を生かした取り組みを継続的に進めてきました。また、歩行者空間整備により相互のネットワーク化を図ることにより港町の魅力形成を進め、まちづくりの中に美的・人間的価値、各地域の自然的・歴

図１　横浜市臨海都心部航空写真

図2　開港150周年記念事業ベイサイドエリア会場（イメージ）

史的・文化的価値などを取り入れ、都市デザインの目標としています。こうした、まちづくりが成果を上げる一方で、オフィスの東京回帰が進むなかで、就業者の市外流出超過や横浜都心部での就業者の減少という事態が起こりました。社会や経済の情報化の進展などにより、都市は必ずしも「成長・拡大」が望めない時代になりました。

そこで、横浜市では、市民生活の豊かさを追求しつつ、都市の自立的発展を目指すためには、横浜固有の「港を囲む独自の歴史や文化」を活用し、芸術や文化の持つ「創造性」を生かして都市の新しい価値や魅力を生み出す都市づくりを進めることがふさわしいと考え、文化芸術・経済の振興、横浜らしい魅力的な空間形成というソフトとハードの施策を融合させた新たな都市ビジョンである創造都市への取り組みを始めました。新しい方策として、業務・商業を主体に機能強化を行うとともに、文化芸術・観光という新たな視点で都心のまちづくりを進めるため、二〇〇四年一月には、市長の諮問機関である「文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会」が、「文化芸術創造都市―クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」を行いました。

提言は、文化芸術創造都市のブランドを確立するとともに、これを経済活動、地域資源に着目した都市づくりとの連携のもとで展開することが望まれるとして、

①アーティスト・クリエーターが住みたくなる創造環境の実現

②創造的産業クラスターの形成による経済活性化

③魅力ある地域資源の活用

④市民が主導する文化芸術創造都市づくりの四つを挙げました。

横浜市では、「提言」を受けて、二〇〇四年四月からは、文化芸術都市創造事業本部を立ち上げ、文化芸術による都市の活性化に本格的に取り組み始めました。こうした組織を立ち上げた理由は、目的のはっきりしたプロジェクトを実施するため、恒久的なものではなく迅速に動ける必要があること、仕事の領域が、現在の横浜市の機構で言うと、市民活力推進局、都市整備局、港湾局、環境創造局など多岐にわたり調整が必要であることからも、事業本部という組織が適当と考えました。また、二〇〇九年の開港百五十周年や、羽田空港の再拡張・国際化などを踏まえ、二〇〇六年度からは、現在の組織である開港百五十周年・創造都市事業本部を立ち上げ現在に至っています。

現在、事業本部の目標実現に向けて重点的に取り組む戦略プロジェクトとして、「ナショナルアートパーク構想」、「創造界隈の形成」、「映像文化都市」、「横浜トリエンナーレ」、そして、これらのプロジェクトを支えるものとして第五のプロジェクト「創造の担い手育成」の合計五つのプロジェクトを進めていますが、その中で特に百五十周年に向けて取り組んできたもの、取り組んでいるものをご紹介します。

ナショナルアートパーク構想は、横浜都心部のウォーターフロントで、港固有の歴史的資産を生かしながら、文化芸術活動と連携して、質の高い都市空間や、国際的な文化芸術拠点を整備することを目指すプロジェクトです。

横浜港大さん橋埠頭のつけ根から左手方向へ延びている防波堤を上から見ると象の鼻に似ていることから、通称『象の鼻』と呼んでいる横浜港最初の築港遺跡があります。横浜港発祥の地である象の鼻地区を、開港百五十周年を記念する象徴的な事業として、横浜の歴史と未来をつなぐシンボル的空間として再整備を進めています。同時に同地区を中心としたエ

図３　象の鼻夜景パース

図4　象の鼻テラス（イメージ）

リア一帯を、横浜を代表する国際的な文化観光交流ゾーンの一つとして、創造的な機能の集積を図ります。「象の鼻パーク」内に、日常的なアート作品の展示や音楽・ダンス・演劇等のパフォーマンスを行う、カフェ併設の休憩スペースを備えた「象の鼻テラス（多目的レストハウス）」が二〇〇九年六月二日に象の鼻パークと同日にオープンします。

象の鼻地区が公開されると、みなとみらい・赤レンガ方面と山下公園・中華街方面の歩行者の軸線と日本大通りの軸線がここで交差し、都心部を回遊する憩いの場として人の流れが一変する観光交流拠点になるものと期待しています。

二〇〇八年はまた、百五十周年のプレイベントとして、質的にも東アジアを代表する現代美術の国際展「横浜トリエンナーレ」の第三回展を九月十三日から十一月三十日まで、百五十周年記念イベントが予定されている新港ピア会場を中心に開催しました。横浜トリエンナーレと連動して、かつて違法な特殊飲食店が軒を連ねていた初黄・日ノ出町地区を文化芸術の力で再生させるプロジェクト「黄金町バザール」が街中展開され、トリエンナーレ三十万人、黄金町バザール十万人の来場者の実績を上げてきました。

文化芸術を核に、まちづくりや産業集積、市民社会の活性化を三位一体で進める「創造都市」への取り組みは効果も見えてきており、さらに質的な展開を図る第二段階に至っています。創造都市をさらに推進するには、行政の力だけでなく企業、ＮＰＯなど各種団体の力が必要ですが、二〇〇八年二月、市内・市外の企業を対象に、企業ネットワーク設立の呼びかけを行いました。企業ネットワークは、創造都市の都市政策に

関心を持つ企業が参加できるオープンな集まりで、企業相互の連携、情報交換、調査研究を通じて、「食」「ものづくり」「ファッション」などにもウイングを広げ、新しいビジネス・文化の創出につながる場となることが期待されます。企業同士の連携によって、行政が介在しないところでも創造都市への取り組みが行われる事例が増え、経済の活性化につながることこそ、新たな都市のステージと考えます。

開港百五十周年を迎える二〇〇九年には、創造都市で培った都心部の魅力を、祝祭性のあるさまざまな催しにつなげて、横浜を国内外に発信しようとしています。開港百五十周年を迎えるにあたり、これまでのプロジェクトや国内外の交流の成果の上に、国内・外の創造都市間の取り組みを都市間で共有していく会議「世界創造都市会議（仮称）」や新たな映像分野の国際的芸術祭「横浜国際映像祭２００９」を開催する予定で準備を進めています。

また、開港百五十周年記念事業では、トータルテーマ「出航」を設定して、テーマイベント「開国・開港Ｙ１５０」を開催します。横浜のマザーポートから世界へ向けて、日本の近代化百五十年を見つめ直し、これからの百五十年に向かって、持続可能な都市を目指して、「出航」します。イベントは次の日程で開催されます。

・ベイサイドエリア　二〇〇九年四月二十八日（火）～九月二十七日（日）

・ヒルサイドエリア　二〇〇九年七月四日（土）～九月二十七日（日）

新港地区の「Ｙ１５０はじまりの森」では、先鋭的なアーティスト集団により作られた「生命のある機械」ラ・マシンが日本に初上陸します。巨大なオブジェは街全体を劇場に変える力を持っています。来場者の皆様には、単なるイベントにとどまらない巨大スペクタクルを体感していただくことで、百五十周年記念事業の感動を記憶にとどめていただくことを期待しています。このほか、「横浜ものがたり」「ナイトピクニック」等の企画など、多彩なイベントがたくさんありますので、公式ホームページ（http://event.yokohama150.org/）をご覧くださいますようお願いします。

開港百五十周年記念イベントで祝祭性にあふれている横浜に来て、見て、楽しんでいただくことを期待しています。

（いまい　しんじ）

図５　「ラ・マシン」（※実際のオブジェはこの図とは異なります）

特集４

アイラブ ヨコハマ

ジャーナリスト
バーリット・セービン

作家のローレンス・ダレルは「あなたは二つの生まれた場所を持っている」と『青い渇望』の中で書いた。「あなたが実際に生まれた場所、もう一つは実際に現実に目覚めた好みに合った場所である」と。私は実際に生まれたのはニューヨークシティだが、ダレルが言うようなもう一つの生まれた場所は横浜だろう。

私が横浜に初めて足を踏み入れたのは、一九七五年（昭和五十年）ごろだった。フリゲート艦の乗組員であった私は、先輩に中華街へ連れていってもらった。

当時の横浜は、今より潮の香りがしたと思う。桜木町駅から海にかけては三菱重工業の造船所があり、堀川河口にはしけが集まり、そして桟橋には横浜とアジア大陸の間を定期的に往復する輸送船が停泊していた。

昭和五十年代にはベトナムから血の気の多い米兵が休養と娯楽のために横浜へ立ち寄ることはもはやなくなったので、横浜の悪名高い暴力は減った。けれど商船から上陸した船乗り専用のバーがたくさん立ち並んだハッピーストリートと呼ばれた中華街の裏通りを歩くと、広重の『御油（ごゆ）』という版画で、留め女が旅人を強引に宿へ連れ込むように、ホステスが日焼けした入れ墨のマドロスを店内へ引っ張ろうとした。マドロスはほとんど北欧人なので、ドアの辺りに「ノルウェー語ができる」などという表示があった。しかし、コンテナ化が進むにつれて乗組員の数が減り、船が停泊する時間も短くなったので船員専用飲み屋などがなくなり、大きな中華料理店が取って代わった。ハッピーストリートは消滅した。

私はジャズが好きで、「ウインドジャマー」という中華街の店へよく行った。今でもたまに立ち寄る所だ。このジャズカクテル・ラウンジは一九七二年（昭和四十七年）にジャズが大好きなジミー・ハーベイさんとジェームス・ストックウェルさんがオープンした。ここは教会ではないのだから、日本のライブハウスみたいに行儀よく演奏を聴くのではなく、音楽は音楽、バーはバーとして楽しんでもらいたいということだったらしい。店内は港町横浜らしく、大型帆船のイメージにこだわって造られた。

ストックウェルさんは、いつもカウンターで数人の中年外人客にちやほやされ、私に「Hi young fella（やあ、若者）」と挨拶してくれた。実際、私は若かった。

観光地としてにぎわう中華街だが、私の好きな場所はさほど観光客と縁がない山下町公園だ。この小さな公園の中華風のあず

まやは、明治時代にそこにあった會芳楼（かいほうろう）という劇場にちなんで會芳亭と名付けられたらしい。

真夏の夜、おじいさんたちはベンチに座りながら北京官話の新聞を読んだり、おばあさんたちはあずまやの下で中国語で話したりしている。中華街大通りから上海路の突き当たりにある會芳亭を見ると、中国を思わせる風景だ。華僑の人々が集まるこの公園が好きだ。

ウインドジャマーでは、オープンしたころ、たまに来た客船のバンドのメンバーとハウスバンドが一緒にジャムセッションをしたそうだ。ジャズというアメリカの音楽は、大正時代に東洋汽船の客船によって横浜や神戸に持ち込まれ、港町の一級のホテルで演奏された。関東大震災後も、世界一周中の豪華客船が寄港すると、ホテルニューグランドのレインボー・ボールルームに社交界の花が集まり、日本一のフィリピン人オーケストラの伴奏とともに踊った。

創業一九二七年（昭和二年）のホテルニューグランドは、横浜が震災の廃墟から立ち上がったシンボルである、人生で最高のものは、いくらお金を出しても手に入らないといわれようが、私はホテルニューグランドの二階のロビーに立ち止まるだけで幸せな気分を味わえる。アールデコの透かし彫りや川島織物の天女などがあるこの空間は、西洋と東洋の融合であり、何度訪ねても飽きない。

ホテルニューグランドは、チャールズ・チャップリンをはじめ、ベーブ・ルースやダグラス・フェアバンクスなど数多くの高名な人を迎えた。ダグラス・マッカーサーもその一人で、元帥が戦争直後に泊まったことにちなんで名付けられたマッカーサーズスイートという部屋に、彼が

中華街の山下町公園

使った丈夫なカバザクラの机がある。

マッカーサーは朝食に二つ卵を食べる習慣があったが、ニューグランドでは一つしか出されなかったそうだ。マッカーサーが理由を問うと、横浜中で卵を一個しか見つけられなかったということが分かり、食糧不足の深刻さを知った彼は、進駐軍に地方の食料品を食べるのを禁止した。

歴史的にも征服軍の慣行と反したマッカーサーの禁止令は、米軍占領中有効だった。もしかしてそのカバザクラの机でマッカーサーはこの指令を出したのだろうか。

食糧不足といえば、戦後、日本人は野毛町の闇市で買い物をしたが、市内の他の地域は進駐軍に大部分が接収され、野毛町は避難地区同然の存在となっていた。

野毛町も区域再開発されたが、その本質は失っていないと思う。野毛町は横浜市内で一番日本らしい地域だ。柳やちょうちん、そしてすだれで飾った料理屋は漢字で書かれた看板を出し、守り神は瀬戸物のタヌキだ。

アジアでは同種の商売をやっている店が同じ一筋の道に軒を並べることがある。例えば上海には鳥かごの道があって、天津には判を彫る職人の道がある。こんな意味で野毛町はアジアらしい地域でもある。この町にはフグの店がたくさんある「フグ通り」もあれば、広い店内で高そうな仏壇を展示する店が多い「仏壇通り」もある。それとも「フグ通り」があるから仏壇通りがあるということかもしれない。その答えはそのコックの腕しだいだろう。

野毛町の柳通り

野毛町にも戦後にできた洋食屋はまだある。レトロ調スタイルを出そうとはしないが、ありのままのレトロのようだ。私は「センター・グリル」という店でよく「ハマランチ」を食べる。これはステンレス製の皿に山盛りに載せられたオムライスとチキンカツとサラダだ。

または、本来の和食の味にこだわる人は野毛へ行く中年の人たちに多い。

野毛町はニューヨーク市のグリニッチビレッジを思い起こさせる。両方とも町並みが低いし、狭い道が入り組んでいる下町だ。それに芸術の色が濃い町だ。野毛町の場合は「野毛大道芸」があり、ジャズの店が多く、それに長谷川伸など作家とのゆかりの深い町だ。言うまでもなくグリニッチビレッジはモダンジャズの本場だし、または二〇世紀のアメリカ文学の原点だ。

野毛町から大岡川を挟む伊勢佐木町が一九世紀に歌舞伎や寄席でにぎわった。この町は昭和初期から「ザキ」と呼ばれ、そこを散策するのは「イセブラ」と呼ばれた。一九七八年（昭和五十三年）にザキがモール化されたことによってイセブラは形式化された。今でも庶民のにおいがするこの町には洋品店、着物の店、古本屋、喫茶店、

映画館、ゲームセンターなどが立ち並ぶ。「蛇や」という店は明治の見世物小屋を連想させるし、船員はザキを通じて「コリアン・マーケット」へ行く。日が沈んだらギタリストたちは一丁目ごとに演奏する。人気バンドである「ゆず」は伊勢佐木からスタートした。

伊勢佐木町の四丁目まで歩くと、花岡岩（かこうがん）のピアノがある。ボタンを押すと、青江三奈の『伊勢佐木町ブルース』が流される。この曲の流れる記念碑が、目立つ形で低俗な、楽しいところにいかにもザキらしさが込められたと思う。

私は毎年この時期になると、本牧にある三渓園の梅を見に行く。湯茶接待が行われる「初音茶屋」というあずまやで、湯気が出ている熱い麦茶を飲みながら梅の花を観賞する。

横浜という街は、西洋文化の影響を受けながら発展し、街中にアイスクリーム、新聞、テニス、鉄道など西洋文化の発祥地を記念するモニュメントが立っている。

しかし、横浜の中で、欧米の影響をあまり受けなかった場所は三渓園だ。原富太郎（号：三渓）は奈良、京都などから日本の代表的建造物を本牧三之谷に移築し、立派な庭園を造った。

裕福な人物が城、屋敷、庭園を造るのは珍しくないが、そこへ一般大衆を招くのはまれだと思える。原は一九〇六年（明治三十九年）、開園とともに三渓園を一般に公開した。自然の恵みは皆のためであると考えたからだ。三渓園の意義は、その精神の寛大さにあるのではないか。

本牧は江戸時代から美しい景色で知られ、広重は一八五八年（安政五年）に富士山を本牧からスケッチした。一八八七年（明治二十年）ごろ富太郎の父である糸商の原善三郎は三之谷の丘の上に別荘を建て、房総半島や東京湾、そして箱根の山々を一望に収めるその別荘を訪ねた伊藤博文は「松風閣」と名付けたそうだ。そして一九三三年（昭和八年）に足達謙蔵元内務大臣は湾を見渡せる突端に「八世殿」

三渓園の初音茶屋から見た梅林

大桟橋の船

という殿堂を建てた。戦後、建築家のアントニン・レーモンドは涼しい潮風を楽しめるように断崖の上にアパートを設計した。

ところが昭和三十年代より埋め立てによって海の気配はなくなり、海を見下ろす建築物は中央アジアのアラル海が干上がった後に消えた漁村に残された船のような存在に思う。しかし本牧の美は三渓園に残り、かつて原や足達などが本牧の海岸に引かれたように私は三渓園に引かれる。

桜木町駅より海の方、かつての三菱重工業の造船所跡にみなとみらい21の摩天楼がそびえる。一九八二年（昭和五十七年）に始まったこの港の再開発プロジェクトは、横浜港に対する二一世紀の観光やコンベンションの構想を体現する。

観光客を満足させようとすることには、いろいろな努力があったと思う。山手の関東大震災前の建築物は改装、一般公開され、関内地域の建築遺産は保存され、明かりで照らし出される。みなとみらいには旧貨物列車の線路を利用する汽車道という遊歩道が日本丸メモリアルパークとナビオス横浜を結び、それを歩く観光客が水面に映し出された遊園地の明かりに魅了される。

横浜は米兵による本当の暴力から解放されたが、ゴジラとモスラの最終決戦はこのみなとみらいで行われた。

船から横浜に上陸した私は、みなとみらいの隣にある大さん橋の先端から港を眺めるのが好きだ。今でも汽笛の音が快い。私はその音を聞くと、もやいを解かれた船がゆっくりと岸壁を離れ、スピードを上げながら広い船跡を残して水道へ、そして果てのない青海原へ進む光景を想像する。

おそらく私は山手の外国人墓地に埋葬された後も汽笛に耳を傾けるだろう。

（バーリット・セービン）

連載Ⅰ
あの町この町
第31回

八福神のお出まし――新潟県・糸魚川市

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

糸魚川と聞いて、それが北陸筋の町だとは知っていても、はたして何県に属すのか、すぐには言えない人が多いのではあるまいか。長野県なのか、新潟県なのか、それとも富山県なのか。

すぐには答えられず、また思案のあげくまちがって答えたとしてもムリはないかもしれない。地図をひらくとわかるとおり、新潟県ではあれ、長野県、富山県と県境を接する西端の位置にある。しかも長野と富山側にせり出したかたちになっていて、三県のうちのどれに入っても地理的にはおかしくないのである。

北陸道のうち筒石（つついし）、親不知（おやしらず）は、とりわけ難所として知られていた。絶崖のような山裾をすり抜けるようにして北陸街道が通じており、日本海が大荒れの日は波しぶきが足をさらいにくる。旅人は念仏を唱えながら目をつぶるように走り通った。

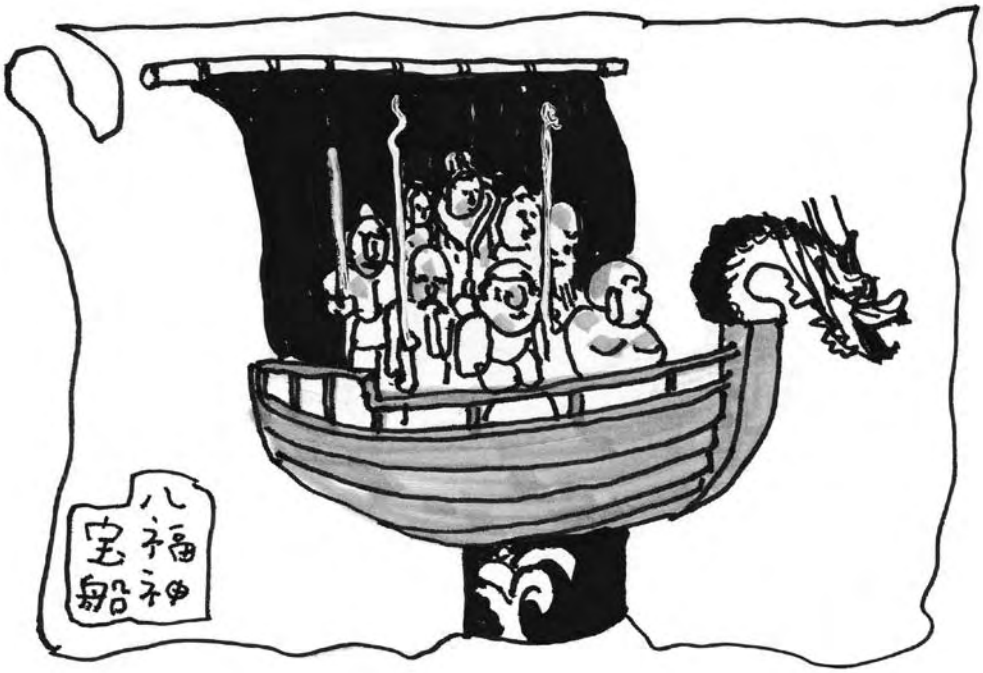
糸魚川はその筒石と親不知のあいだにあって、姫川のつくった小振りの扇状地にあたる。信州と結ぶ千国（ちくに）街道の分岐点でもある。江戸幕府が重視したのは当然だろう。越中・越後の国ざかいにあって信濃の入口ときている。しかも越中は外様大名・加賀百万石の支藩であれば、とりわけ目を光らせているところ。

こんなとき幕府は、結節点のようなところに親藩を置いてお目付け役にした。たとえ小藩でも大切な役まわりなので徳川子飼いの者が送られ、特別の権限をおびている。糸魚川藩二万石、享保二年（一七一七年）以後、松平一統が入封して、明治まで支配した。

そんな歴史からも、まわりのどこにも収まりきらない要素があった。中央権力を後楯にした独立国であって、昔の人も糸魚川の国籍を問われると首をひねったのではあるまいか。「越後筒石親不知」と言いならわして、糸魚川がそのまん中であることを思い出し、それでやっと越後国糸魚川にたどりついた。

駅前からまっすぐ海へのびているのがヒスイロード。海岸沿いの国道8号はトラックがつっ走っているが、一つ手前の浜町通りはウソのようにもの静かで、板塀の上から見越しの松がのぞいている。割烹鶴来家、料亭大久保といった古風な看板が見える。駅前通りをはさみ、東には名代のかまぼこ屋、麩屋、糀（こうじ）味噌店のノレンがひるがえっている。かつてはこのラインが浜に面していたのではあるまいか。

その一つ南寄りが本町通りで、古くは「加賀街道」とよばれていた。参勤交代の際、



加賀様が二千人の供ぞろえとともに泊っていく。本陣を中心とする主だった町屋が臨時の宿になった。

旧本陣は加賀の井酒造として、今も豪壮な軒を誇っている。ほかの町衆も負けていない。結納・仏具の京屋、平安堂旅館（現・骨董店）、旧塩問屋……。本町通りの両側をうめて、しっかりとした町屋がつづき、あいだに点々と弁財天や布袋和尚、恵比須さまや福禄寿のにこやかな石像が立っている。七福神ならぬ八福神なのは、おなじみの七人組に、奴（ぬ）奈川（ながわ）姫という女神が加わっているせいだ。越の国きっての美女として噂が聞こえ、出雲の国のオオクニヌシノミコトがはるばると求婚に訪れたという。

「駅北まちづくり実行委員会」作成の地図は実によくできていて、市中と市街の情報が両面仕立てでくわしく、たのしく絵解きされている。八福神お出ましのアイデアもこの委員会の発案だろう。福の神を単に並べるだけでなく、それぞれを町歩きのキーポイントとするかたち。さらに「花いっぱいの壁」「ほっとタイム」地点、「街なかコレクション」、要所に案内板があって立ち寄りができる。

とりわけめだつのはPのマークの駐車場であって、銀行や信用金庫とタイアップして確保するとともに、自前で商店街駐車場を用意した。旧来の町が頭を悩ますクルマ対策を、八福神がらみでやってのけたぐあいである。

本町を筆頭に旧町八ヶ町が市中を作っている。本町通りの町屋にかぎらず、町内のいたるところに風雪をへたお屋敷がのこっていて、落ち着いた雰囲気をつくっている。

そんな中に糸魚川出身の文人相馬御風の生家がのこされている。相馬家は代々、寺社建築を業とする宮大工だった。藩の普請

棟梁で、名字帯刀を許されていた。社寺のほか橋工事などにもたずさわった。そんな宮大工と肩を並べる名うての棟梁がいて、町屋づくりに腕を振ったにちがいない。

広小路通りの西かたが白馬通り。千国街道の起点にあたる。海ぎわに蒸気茶屋跡の標識。明治、大正のころ蒸気船で働く人たちの茶屋や宿泊所があったのだろう。

その以前は北前船が出入りした。記録によると明和のころ（一七七〇年ころ）から、糸魚川の塩買い船が年ごとにふえている。当地では、「帆前船」、お隣りの越中では「ばいせん」とよんだもので、「北前船」は瀬戸内の言い方だった。

糸魚川の船頭たちの乗りまわした船は弁財船（ざいせん）といって、操りにすぐれ、多少の向かい風でも風を間切（まぎ）りながら進むことができる。越後の米を運んで瀬戸内に入り、米を売って干鰯（ほしか）や塩を買い入れる。干鰯はとびきりの肥料だった。瀬戸内産の塩は塩業界のブランド物である。船運は高級品ビジネスであって、北前船は一航海千両といいそやされた。実際はそれほどでもなく、遭難の危険も多かったと思われるが、そんな塩買い船のもたらす莫大な富があってこそ、糸魚川の重厚な町屋が形成された。

白馬通りは別名が塩の道で、ふんごみ茶屋跡、牛つなぎ石、旧塩問屋街、旧歩荷（ぼっか）宿街、旧船頭長屋街などがつづいていく。「ふんごみ茶屋」は荷役にあたる歩荷衆が、土足のまま土間に上がっていけるスタイルになっていた。塩荷を振り分けにした牛のキャラバン隊が遠く松本城下へと出立する。その出発地の賑わいとやりとりとが目に見えるようだ。

ＪＲ駅のすぐわきに「ヒスイ王国館」という豪勢な名前の観光物産センターがあるが、糸魚川市は日本国最大のヒスイ原産地をもっている。漢字では「翡翠」、もともとは鳥のカワセミの異称であって、鉱石の色がカワセミの羽と似ているので名づけられた。古墳からしばしばヒスイの装身具が出土するように、太古の昔から貴重な硬玉とされてきた。

糸魚川はまた「フォッサマグナ」の北端でもある。日本列島を二分する巨大な地質の溝であって、ヒスイのような石が顔を出すのも、東西の地層がぶつかり合った置き土産かもしれない。さらに「平成の大合併」で両隣りの能生（のう）町と青海町が糸魚川市になり、筒石、親不知が市域に入った。かつての天下の難所は現在は新名所というもので、さっそくコミュニティロードがつくられ、展望もよく、地元漁港で陸上げされた鮮魚にありつける。

これもフォッサマグナの副産物かもしれないが、近くにいくつも熱泉が湧き出ている。笹倉温泉、焼山温泉、姫川温泉、そしてその名もフォッサマグナ糸魚川温泉……。おもえばこれほど観光資源に恵まれているところも珍しいだろう。

だからこそクルマ族を町によびこみ、しばしのんびりと時を過ごして、なろうことなら買物をしてもらいたい。「駅北まちづくり実行委員会」で知恵をしぼって、駅舎のすぐ東側には一七二台収容の大駐車場を実現した。西側にはＪＲ利用者用の駐車場があって、鉄道と連動しているところがたのもしい。

本町通りを「雁木通り」ともいうのは、歩道に雪国におなじみの雁木がのびていて、冬も雪に妨げられず、しかも年中、歩行者天国であって、警笛に脅かされることもない。八福神のわきには緋毛氈つきの長椅子がそなえてあって、腰をのせてイップクできる。

「糸魚川名物　マキノ式飴」

看板にひかれて小路に入った。きれいな店内で若い女性がキビキビと仕事をしている。「マキノ式」の特色は、まず大きさのよ

うで、飴一つがピンポン玉ほどもある。口に入れ、しばらく両頬をふくらましてアグアグしていた。つづいて片頬に移動させた。水飴を固めたような素朴な甘味が、ゆっくりと口中にひろがっていく。

幼いころ、バカでかい黒飴があって、天に昇るような気持で頬ばった。アグアグしていると友だちに背中をたたかれ、口からとび出したのが土まみれになり、ベソをかいたこともある。

「弁償せい、弁償！」

たしかそんなふうに友だちに毒ついた。ある世代だけの子供用語だったのかもしれないが、どうして「弁償」などの言い方をしたのか、いまもってよくわからない。

詩人田中冬二がここを訪れたのは、いつだったか。季節は初夏と思われる。「糸魚川にて」と題した詩は「巴丹杏を売っていた／もう氷水屋も出ていた」と書き出されているからだ。市中に入る「別所」というところでビールを飲んだという。

古い町家のうしろはすぐ濱になって
あかるい青い青い海
信州から山越えして来た僕の錯覚だっ
たろうか
僕はそこの青い波の間をゆく龍宮の近
衛兵のような赤い魚の群を見た

そんな詩と、舌ざわりのいいマキノ式の飴が手引きをしてくれたのかもしれない。角を曲がったら、いいものと出くわした。一つは謄写印刷機、もう一つは計算尺。「倉庫を整理すると出てきました」の断わりつきで、ショーウィンドウに飾ってあった。

当地きっての文房具店なのだろう。ここにくれば必要とするものがきっとある。いい町にはきっと、そんな信頼性とともに

営業をつづけている店があるものだ。

あの世代までは幼いころ、謄写版の刷り物に親しんだ。学校からの知らせや行事予定、試験問題、すべてがこの小さな機械から生まれた。みなで作文を持ちよって卒業記念の文書をつくったこともある。ギザギザの下敷きをあて、鉄筆で原紙を切っていく。その鉄筆、アブラ紙状をした原紙、手廻しの印刷機、一式がきちんと並べてある。

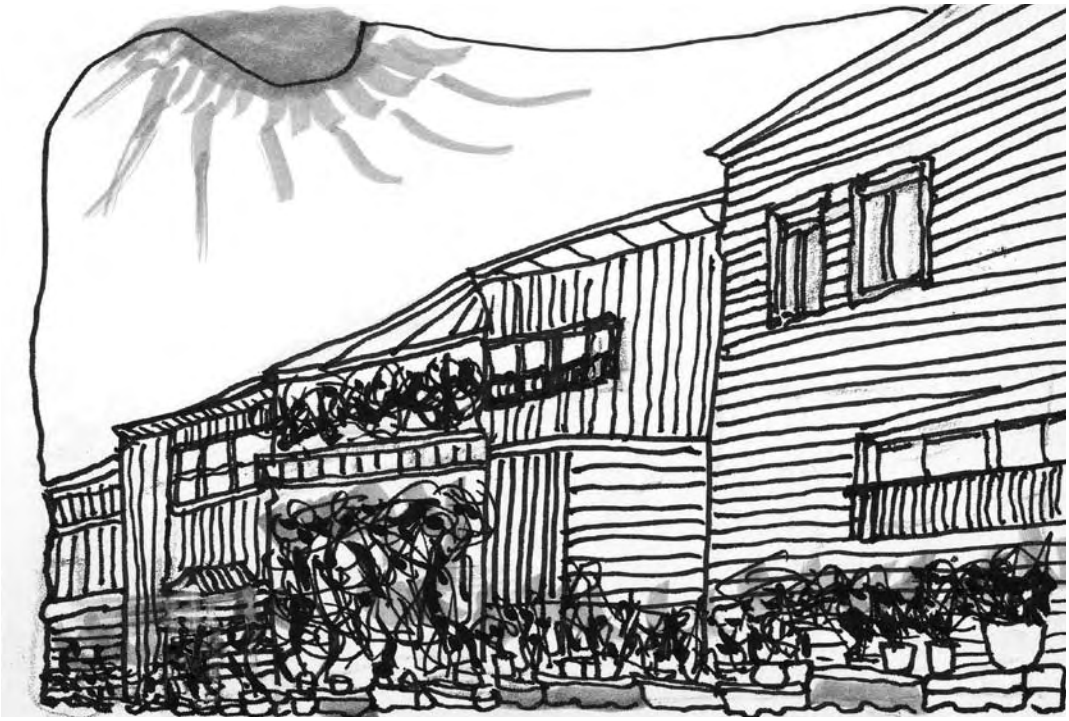
計算尺は現在の計算機にあたるものだが、名前に「尺」がつくとおり、ものさし型をしていた。そこに目盛りが刻んであって、スライドさせるべつの目盛り尺がついており、それを滑らせて数字を合わせると答えが出る。対数の理論を応用したとかだった。夜店で売っていた安物はともかく、プロ用の計算尺なら割り算、掛け算はもとより、因数分解、代数、高等数学にも対応できた。ショーウィンドウにあるのは、あきらかに高級品であって、建築設計の技師などが必需品としたものではあるまいか。

これもまた「街なかコレクション」とかかわっているのだろう。書画骨董にかぎらないのだ。ふところ深い町の倉には、思いもかけぬものが眠っている。謄写版や計算尺は「昭和の宝物」といっていい。貧しくても希望にあふれていた時代に、手先の器用さと勤勉さのたまものというべき発明があいついだ。

本町通りにもどって、またまたいいものと対面した。井上浴場「滝の湯」といって銭湯である。よく手入れされた木造の建物に風雅なノレンが出ている。ちょうど夕方にさしかかり、お湯の恋しい時刻だった。

番台があって、古風な板の間に乱れ籠。まるで夢をみているここちで服をぬいだ。大きな丸いタイルの湯船で、女湯とまん中

雁木通り



花の通り

で仕切られていて、きっちり平等に半円ずつ。仕切りの高さが絶妙である。手をのばすと、向こうに差し出せる。

「オーイ、石けん」

「あいヨ」

夫婦で一つを手渡しっこもできるのだ。タイルが鏡のように磨いてあって、澄んだ湯が五体にしみた。

湯上がりは冷たい牛乳といきたいものだが、それもちゃんとそなえてある。創業は明治にさかのぼる。代をかさね、当節は全国の銭湯がつぎつぎと消えていくなか、糸魚川の「滝の湯」はけなげにノレンをたやさない。客はめっきり少なくなったが、遠くからでもやってくる人がいて、とてもやめたりできないとのこと。品のいい女性がニコニコしている。

自動アンマ機があって、代金は据えつけた当時の二十円のまま。これも「昭和の宝物」の一つではなかろうか。牛乳を飲みながら、肩、背中、腰を入念にもんでもらった。

幸せいっぱいの気分で出てくると、角の寿老人が迎えてくれた。左に行けば海岸で、展望台から日本海の夕陽をながめられる。右に行けば駅前よりつづく夜の飲み屋街。さて、どちらにしたものか、思案しながら前の小公園に佇んでいた。

糸魚川には夏は「おまんた祭り」、冬はあんこう祭りがある。さらに年に数回の雁木まつり、駅前通りでは週に二度、「おまんた市」という夕市が開かれる。市をひやかし、八福神に幸運を祈願して、その足で銭湯につかれるなんて、市民生活のだいご味というものだ。

逢(あう)も不思議 あわぬも夢の 時鳥(ほととぎす)

当地の俳人高野九蚶(きゅうかん)の作。このとき街灯に、やわらかなだいだい色の明かりがついた。夢のホトトギスの道案内というもの。寿老人に見送られ、いそいそと右に折れた。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
風土燦々④

いだごろ踊りの山里（前編）
――宮崎県美郷町

ルポライター　飯田　辰彦

九州に通い始めのころから、南郷村（現・美郷町南郷区）の「いだごろ踊り」のことが気になっていた。古い様式を残す盆踊りで、魚のイダ（ウグイ）と関係があるらしい、といったことが知り得るすべてだった。

そんなとき、仕事の女神がほほ笑んだ。昨年の春四月に、思いがけず旧南郷村から一年を通しての取材依頼が舞い込んだのだ。まっ先に盆ごろのスケジュールを確保し、早々と航空券を手配し、夏の取材に備えた。こんなラッキーなことがあっていいのだろうか。

旧南郷村は、百済伝説で知られる神門をはじめ、鬼神野、渡川、水清谷と四つの大字で構成される。それぞれにいだごろ踊りが伝承されており、なかでも渡川のそれは古式をよく残しているという。八月十二日に現地入りしたが、人の動きが出始めたのは、十四日の朝からだった。

この日は各地区ごとに、新盆（初盆）の家をめいめいでお参りし、供養の言葉を述べる。だいたい、午前中に回り終えるのが作法であるらしい。そして、十四日から十八日の夜にかけて、それぞれの地区でいだごろ踊りが踊られるのだ。夜を待つ間に、耳寄りな話を聞きつけた。神門下区で夕刻の四時、供養念仏が営まれるという。

新盆の家で執り行われるこの供養念仏、かつてはどの地区にも伝承されていた。

「今ではこの地区だけになってしまいました。昔は十七日の晩（十七夜）にお寺で営まれたこともあったそうです。戸主の要請があれば、念仏のあとで踊りを踊るのですが、最近はめったにリクエストがありませんな」

地区の長老で、鉦たたきを二十年勤めている坂本定義さんの説明だ。そうこうするうちに、今年新盆を迎えた中森清繁さん宅（伍味地区）で、伝統の供養念仏が始まった。祭壇の前に戸主の清繁さんが座り、その右手には短冊（色紙）を結わえた笹竹が握られている。ちょうど七夕の葉竹の風情だ。鉦の坂本さんと太鼓たたきが清繁さんの脇に寄り添い、あとは地区の人たちが座敷に三々五々席を占めている。

ゆったり、のったりと念仏の誦経が流れ出す。各自に念仏のコピーが渡されているが、以前は誰もがその文句を諳んじていたらしい。「口説もだけど、節もできてない」とは、先の定義さんの嘆息である。手渡された念仏のコピーに視線を落としたところで、目がくぎ付けとなった。

念仏は二種類あって、「鎌倉念仏」と「かぞえ念仏」とから成る。七番で構成される鎌倉念仏のストーリーが、実に意味深なのだ。口説を要約すると――

鎌倉の士族で庄屋を兼ねる名門の家の

倅、弥十郎が十三歳にして法家修業のための旅に出る。途中、信州の茶屋に立ち寄ったとき、天目茶碗や唐絵の屏風に目を奪われる。しかし、若い弥十郎の心を真にとらえたのは、「お茶ふる女郎衆」の哀れな姿だった。

しかし、遊女を身請けするには七十五貫の金が要る。そこで市に出かけた弥十郎は、脇差しを質に置いて、七十五貫の金子を用意する。一件落着ということで、念仏の七番はこう謡われる。

七、質受け取りて帰る時
　西の雲よと仰がれる

他愛もない口説といえばそれまでだが、なぜこうした内容の念仏が新盆の集まりのときに朗誦されるのか、私には分からなかった。失った大事な人（清繁さんの場合は母親）の魂を新盆に迎える念仏にしては、少々ストーリーが飛躍しすぎていないか。それとも、日本人の民俗的心性には、こんな内容の口説が一番マッチしているのだろうか。

鎌倉念仏のあとに続くかぞえ念仏は、文字どおり十二番から成る〝数え歌〟になっている。そこには、現世においては中庸で生きる教えと、旅立った者への尽きぬ哀切の情が説かれている。

中森家での供養念仏風景。ぜひ新盆の家での盆踊りを復活させてほしいものだ

十とやぁ
　徳捨て果てて行く時は
　仏も神もへだてまいぞや
十二とやぁ
　十二単は惜しまねど
　二人の親の名こそ惜しけれ

中森家の供養念仏はわずか三十分余りで終わってしまった。このあと、結局盆踊りは披露されることはなかった。定義さんはと見れば、やはりどこか物足りなさげに畳に視線を落としている。その顔には、はっきりと「今年は踊りたかったのに」と描いてある。直会の席に着くよう清繁さんに勧められたが、これを丁重に断り、私は今夜盆踊りがあるはずの渡川地区に向かった。

途中、神門の天神田から鬼神野の川上迫にかけての一帯は、西南の役（明治十年）の古戦場として知られる土地。今、国道388号の西側山裾にたたずむ万鷲寺は、そのとき薩軍の包帯所に充てられた所だ。山陰には無名戦士の墓などもあり、ふと浮かばれない霊のことを思った。彼らこそ真っ先に、盆踊りで供養される資格があるのかもしれない。

［次号に続く］

（いいだ　たつひこ）

連載Ⅲ
ホスピタリティーの
手触り52

ホテルと旅館

旅行作家
山口 由美

リゾートイメージを牽引する〝お洒落（しゃれ）な〟旅館

日本で泊まるのならホテルより旅館だと、都市でなくリゾートならば、なおさらにそうだと、旅行事情に通じた外国人から言われるようになってずいぶんになる。外国人でさえそうなのだから、その認識は日本人にとっても当然のことで、今、日本のリゾートのイメージを牽引しているのは、旅館、それも団体旅行御用達の旅館から脱皮した、もしくは新たなコンセプトのもとに誕生した、小規模で個人客相手の、さらに言うならば〝お洒落（しゃれ）な〟旅館であると言っていいだろう。

箱根の富士屋ホテルは、私が書いた最初の本の舞台であり、創業者が曽祖父というつながりのあるホテルだが、時々この富士屋ホテルのことを「富士屋旅館」と呼ぶ人がいて、私は戸惑うことがある。

一八七八年（明治十一年）、米国帰りの創業者が、国益のために外貨を稼ぐのだという明治人らしい気概を持って、外国人専用の西洋式ホテルとして創業したのが富士屋ホテルである。以来、ホテルは、一貫してホテルとして、旅館とは一線を画して営業してきた。富士屋ホテルに限らず、明治から昭和初期にかけての時代に創業したホテルは、どこもホテルであることに対して、同じような矜持を持っていたのではないだろうか。それは、旅館という独自の宿泊形態を持つ日本ならではの事情であったと思う。

曽祖父の、あるいは祖父のそうした思いを知っているから、私は「富士屋旅館」と言われると、「ええ、旅館でなくて、ホテルですけれどね」と訂正する。

しかし、最近、こう旅館のほうが良いイメージを持たれるようになると、せっかくそちらの仲間に入れて「富士屋旅館」と呼んでくれているのに、訂正するのも馬鹿げているのかなと思うことがある。

旅館業法の定義で言うのならば、ホテルとは洋式の構造・設備を主とする施設、旅館とは和式の構造・設備を主とする施設を持つものということになる。だが、最近の旅館は、こうした定義など、当てにならないものになりつつある。和風の客室でありながらベッドを備え、フランス料理を売り物にする「旅館」もある。旅館ブームの背景には、和のテイストやデザインやもてなしは生かしながらも、洋のスタイルを積極的に取り入れて、情緒と快適さを共存させてきた、旅館そのものの進化もあるのではないだろうか。

だが、実は、和のデザインと洋のスタイルを共存させるアイデアは、今に始まったことではない。富士屋ホテルでは、創業者の長女の婿、山口正造が経営を引き継いだころから、こうした試みを積極的に取り入れてきた。現在もホテルのアイデンティティーとなっている花御殿と呼ばれる客室棟やメインダイニングは、寺社建築さながらの純和風の意匠が特徴だ。しかしながら、客室にはベッドが置かれ、ダイニングルームではフランス料理が供される。当然、時代が異なるから、提示されるプレゼンテーションは異なるが、和のデザインに洋の居住性を組み合わせる発想は、現代の旅館と共通するものがある。

富士屋ホテルの花御殿

一方、ホテルの側でも旅館に学んだらしき痕跡がある。よく言われるのが、いわゆるスモールラグジュアリーリゾートの先駆けであり、アジアンリゾートブームの原点といわれる高級リゾートチェーン、アマンリゾーツが、そのスタイルやもてなしのあり方において、旅館を参考にしたとする説である。真偽のほどは定かではないが、創業者のエイドリアン・ゼッカーが、日本贔屓（ひいき）でよく旅館に逗留することは事実らしい。

考えてみれば、旅館が先進的に感じる理由のひとつが、最近の先進的なリゾートホテルのありようが、旅館と似てきていることなのかもしれない。例えば、ヴィラと呼ばれる戸建て形式の客室のスタイルは、まさに旅館の離れであるし、客室に付属するプライベートプールや、バスタブを屋外やガラス張りの開放的なバスルームに置く発想は、まさに客室付き露天風呂である。

そのように歩み寄っているのならば、もはや旅館とホテルを別に考えること自体、時代にそぐわないのではないか。少なくとも利用する側に、その必然性はなくなっている。

それなのに日本では旧態依然として、二つの業界は業界団体も別で、垣根を作っているように見える。かつてホテルが、矜持を持ってホテルであり続けた歴史が、そうさせているのだろうか。「富士屋旅館」と言われるたびに、「富士屋ホテル」であると、しつこく訂正してきた私は想像する。

フランスに本部を置くルレ・エ・シャトーという協会組織がある。その名の通り、フランスの城や修道院を改装したホテルなど、小規模で個性的な高級感あるホテルを中心に、ミシュランの星付きレストランもメンバーに連なる。この日本メンバーの多くが、実は、旅館なのだ。フランスからしてみれば、日本の伝統的建造物で、日本的なスタイルを提供する旅館は、まさに日本のシャトーホテルなのだろう。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

海外旅行自由化以来、日本人の海外旅行者数は年々拡大してきたが、ここにきて、若者を中心に旅行離れが進行し、旅行市場自体が縮小していく状況にある。そうしたなか、昨年観光庁が設立され、ツーリズム振興が国として取り組む重要政策として位置づけられたのは非常に有意義なことだが、今後のツーリズムの行方を考えた場合、課題は山積している。

旅行・観光業に長年携わってきた著者により二〇〇五年から三年間にわたり旅行業界誌『トラベルジャーナル』に連載され、このほど国内旅行やインバウンドの話題を中心に観光振興の手法についてまとめられた本が、**『ツーリズムの新しい諸相(小林天心著、虹有社)』**だ。

第一章は、新しいツーリズム・デザインのヒント、第二章・観光・旅行産業の明日への技法、第三章・次世代へつなげる観光と地域振興、第四章・観光立国へ向けた課題、で構成。本書では、具体的な観光振興策の事例も多く取り上げられ、今後の観光振興策を考える上でヒントとなる、非常に興味深い内容となっている。

「一九六四年の海外旅行自由化は、自分を含めた多くにとって、長い鎖国からのようやくの解放だった……。しかし、それから四十年以上がすぎ、「旅行ブーム」を担った世代の交代はすすんだ。当時の二十歳は、今の六十歳なかばであり、やみくもな旅行に対する、あるいは海外への憧れは薄れた。つくれば売れた海外旅行はもう過去のものになってしまい、次の世代、その次の世代にいたっては『旅行なんてメンドー』とうそぶく時代になった」。

著者は、現在の旅行離れを憂え、「先行した世代が、旅行の効用あるいは、すばらしさを体験することなく、『行った、見た、帰った』というレベルの旅を語り、続く世代の夢まで消し去ってしまったかもしれない……」と、旅行業界がどんどん増える需要をこなすことに精いっぱいで、次の需要のタネをまき育てるという、マーケティングを怠ってきたと指摘する。

今後の日本のツーリズムを考えるとき、旅行本来の意義や魅力を伝えることが求められる時代だからこそ、ぜひ参考にしてもらいたい一冊である。

B6判　294ページ
定価　1,995円
虹有社

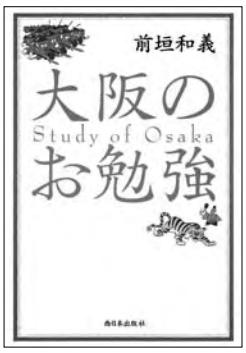
大阪といえば、食いだおれ、タイガース、お笑い……などそれぞれイメージが違うだろう。そのなかでも、お笑い、面白い街のイメージが特に強いかもしれない。

そうした大阪の歴史と文化について、自称・大阪研究家の著者がまとめた本が、**『大阪のお勉強(前垣和義著、西日本出版社)』**だ。

本書では、「食」と「動物」の視点からまとめており、大阪の大ネタ小ネタが六十三話ぎっしり詰まっている。特に大阪弁の「くだらん」「どんならん」などの語源や、大阪独特の食文化と他の地域との比較など非常に興味深い内容である。イラスト入りであるのも楽しめる仕上がりである。

今まで知らなかった大阪の奥深い歴史・文化に触れ、ぜひ大阪を違った視点で歩いて楽しんでみてはどうだろうか。

(挑全)



B6判　248ページ
定価　1,365円
西日本出版社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■**旅行者動向２００８ 最新刊**

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果を解説。最新号では「旅行先での現地情報収集の実態」「年間旅行支出からみた国内旅行マーケットのトレンド」を特集。〇八年七月発行。

■**Market Insight 2008**
（日本人海外旅行市場の動向）最新刊

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。〇八年七月発行。

■**産業観光への取り組み**

「産業観光」への取り組みと「着地型旅行商品」について、先進地（国内二十事例、海外三事例）を例に、分かりやすく体系的に、さらに今後のあり方、取り組み方について紹介した業界初の本。横浜商科大学教授・羽田耕治氏、（財）社会経済生産性本部余暇創研（現（社）日本観光協会常務理事）・丁野朗氏が執筆・監修、ＪＲ東海相談役・須田寛氏が推薦。〇七年十月発行。

※当財団出版物の注文はホームページからお願いします。
担当：財団法人日本交通公社　観光文化事業部
電話　03・5208・4704　http://www.jtb.or.jp

■**温泉地再生**

温泉好きの日本人が多いのに温泉地に元気がない、そのギャップへの疑問から始まった〝元気な〟温泉地の取材。さらにリーダーインタビュー、そして他分野のマーケティング調査など多様なデータをヒントに、温泉地の現代的・社会的な意義を探る。当財団主任研究員・久保田美穂子著　学芸出版社より〇八年六月発行。

※本書は、書店へのご注文をお願いします。

次号予告

●古くから日本人は和歌に桜を詠み込んできました。次号は、「日本のこころ桜文化」と題し、桜と日本人、桜の楽しみ方、桜文化振興などについて特集します。

調査研究だより

●旅行のスタイルは時につれて移り変わりますが、近年は訪れた土地の生活文化への興味がより一層高まっているように思います。普段の生活の中に溶け込むあまり見落とされがちな何げない風景、あるいは人々の毎日の食卓を彩り続けてきたさりげない食の魅力が旅人によって「発見」され、ブログ等を通じて多くの人に紹介されるケースも珍しくありません。

●これらの風景や食といった要素は、いずれもその土地固有の自然条件・社会条件を背景として培われてきた生活文化の一側面にほかなりません。今後、観光振興を各地域で推進する上で、これらの地域固有の生活文化の魅力を来訪者の視点で丁寧に発掘して新たな価値づけを行うこと、その価値をもって土地の固有性の保存・継承を図ること、さらには地域経済の自立的発展のサイクルにつなげていくことが一つの要諦になるものと考えられます。

●当財団では、各地で観光・交流を主眼に置いた地域振興に携わった経験を生かし、今後も個性豊かな観光地づくりを通じて多様で魅力的な国土形成に寄与してまいります。

（堀木）

編集後記

◆百年に一度といわれる世界的不況のなか新年が明けました。先行きの見えない不安感に覆われたこの苦境を克服するために、チェンジが叫ばれています。幕末から明治にかけての日本も歴史的転換期を経験しました。開国という大変革を遂げ新生日本が誕生、横浜が舞台となりました。今年開港百五十周年を迎えます。文明開化を先導し、幾多の困難を乗り越えて今日の繁栄を迎えています。本号ではその歴史をたどり、将来を展望するとともに、ミナトヨコハマの魅力をご紹介しました。

◆古くジパングと称された日本は欧米の知識人から熱いまなざしを受けていました。開港を待ちかねていたように来日した一人にヘボン式ローマ字を考案したヘボン博士がいます。ニューヨークで開業医として名高かった博士は一八五九年（安政六年）十月に来日。近代的医療で多くの病に悩む人々を救うとともに、横浜山下町に開いた「ヘボン塾」で教育にも力を注ぎます。ヘボン塾は明治学院へと発展し、その精神は現在（いま）に続いています。ヘボン博士もまた、日本をこよなく愛し偉大な業績を残されました。横浜百五十年の歴史は今後の日本の行方に多くの示唆を投げかけています。

◆本年を飾る表紙は樋口氏撮影の郡上八幡城です。一九三三年（昭和八年）に天守閣を再建。木造再建城としては日本最古。その優美な姿が親しまれています。（宇八）

観光文化　第 193号

第 33 巻 1 号通巻第 193 号

発行日 2009 年 1 月 20 日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 1 鉄鋼ビル
〒 100-0005　☎ 03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 2 鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒 100-0005　☎ 03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ＩＳＳＮ　０３８５－５５５４